

勤王僧天章禪師の事跡

荻 須 純 道

維新史上に於ける勤王僧の活躍は西郷南洲と關係のある僧月照等二三を除いては一般に餘り知られてゐない。天章禪師もその輝かしい英名は餘りにも有名であるが、その事跡に就いては、眞言宗阿刀弘文師が研究されてゐると聞くが淺學寡聞の故に詳細なる發表を知らない。近時「維新の史蹟」なるもの公にされ、通俗一般に知られて來たが、私は茲に刺客の難に遭ふ迄熱烈に尊王攘夷を叫んだ禪師の學問思想への考察と、それより展開する尊王攘夷の實踐運動である憂國の生々しき禪師の事跡の一斑を誌すこととした。固り杜撰なるものであるが、時局下の精神運動に幾分なりとも参考になれば幸甚である。

禪師諱は慈英、字を天章と號し、別に肇海、竺堂、杞憂菴等の號がある。文化十二年京都に生れ商家の出であると云ふが、父母の名や屋號等は詳らかでなく、従つて町名等も不明である。

幼にして佛門に入り佛弟子となつたのであるが、初め淨土宗に屬する京都寺町松原上る淨國寺の

智足肇和尚に就き出家得度した。肇海はその時命名された名である。後江戸芝増上寺の學寮に學び、宗學を始め一般佛敎學その他内外の學を修めたが、當時共に孜々として研鑽を怠らず意氣投合した學友に鶴飼徹定師がある。この鶴飼徹定師は後知恩院第七十五世の法燈を承け繼ぎ管長職に就いた方であるがこの鶴飼徹定師とは同僚であつた。

儒學を松南摩嶋、仁科白谷等^{註①}に學び、殊に仁科白谷の下にあつては高弟であつたと云ふ。二十四歳の時感するところがあり、改衣して禪門に歸し當時學德世に喧傳された全室慈保禪師（建仁寺塔頭靈洞院住職で建仁寺第三百四十八世となり、文久三年三月四日世壽七十六を以て入寂す）の下に投じた。慈保禪師の下に投ずるに當つては同じ仁科白谷の門下であつた梅辻泰樵の紹介に依るものであるから梅辻泰樵は慈保禪師と昵懇であつたことが想像される。慈保禪師に投ずるに至つた動機には次の如き理由があつたと傳へられてゐる。

一、國家多事なる秋に當り、禪機を得たいこと。

二、建仁寺には宋儒楊誠齋文集の宋版があるから、これを讀破し、憂國忠憤した楊誠齋の正心誠意の學を研究すること。

三、當時朝鮮との外交を司つた對州以酩菴の輪番に成り度い。

と云ふ三つの理由が青年肇海をして改衣歸禪せしめたのであつた。

慈保禪師の下にあつては參禪學道を怠らなかつたが、天保十二辛丑年師の慈保禪師が五山碩學科に任ぜられ、對州以酌菴の輪番となり、朝鮮書契御用の鈞命を帯びて渡航した時、隨侍して對州に赴いた。その時の朝鮮の國譯官は秦知事清翁書記官なる者で、筆談を以て應酬した。その筆談を録したものを辛丑隣盟一卷と云ふのである。

天保十四癸卯年四月建仁寺に歸山するや、塔頭堆雲軒に住し、京師十刹真如禪寺に陞位の鈞帖を拜戴して五山西堂位に列した。

人と爲り機鋒精銳にして詩文和歌に長じ、勤王の精神に燃えて常に讀書を怠らず、最も拔録を力め、稗史、野乘、古今を問はず見聞するところを筆記し、日々十五枚を課したと云ふ。又容貌は甚だ瘦せて居り、生姜糖が非常に好物であつたとのことである。

米國水師提督ペリーが浦賀に來航した嘉永年間頃より國事を大いに憂へ、勤王愛國の精神に燃え大原重徳等憂國の志士と交り國事に奔走した。その間宋儒楊誠齋の文集より千慮策三卷、東宮勸讀錄一卷等^{註①}を選出し、句讀返點を附して世に行ひ、又憂國の熱情を詞藻に發露したものを竺堂文集と云ひ、晩年上梓發刊されたものに杞憂菴梔花百絶(華夷名義辨を附録とす)、杞憂菴五十六字詩(一百二十八首の詩で杞憂餘草を附録とす)等各一卷があり、多數未刊行のものあるも著書は後に誌すこととする。就中安政四年八月刊行された千慮策は幕末志士の義憤を高まらせたといふ。

文久三年、京都十刹の一である洛西鳴瀧の妙光寺に轉住したが、明治四辛未年七月九日佐幕派の一味の爲に暗殺された。時に年五十七。鳴瀧妙光寺に葬られた。

二

以上の略傳は禪師の著書や禪師より親しく教を受けて、建仁寺塔頭大中院に住持した石門和尚の筆跡である禪師傳記の草稿や又禪師に親交のあつた梧菴和尚の執筆になれる「竺堂隨筆の事」等を主なる史料となし、兼ねて大中院現任職古野東越師の説明を參考して草したものであるが、就中常澄石門和尚の筆跡である禪師傳記の草稿は禪師の傳記を研究する上に貴重なるものである。

さて禪師の勤王思想が如何なる學問思想に淵源するかを考察し、そこに實踐された勤王運動や、或は又禪師に依りて表示され、國民的熱情をそゝる愛國思想に就き以下概要を誌すこととする。

先に一言せる如く禪師は緇徒であると同時に儒家であり、儒學者仁科白谷の高弟であつた。依つてその尊王思想に於ても儒家の立場より君臣の大義を説いたことは否み難い。然らば幕末維新の風雲急なる秋、熱烈なる勤王運動をなし、遂ひに鳴瀧妙光寺に於て佐幕派の爲に非業の最期をなした勤王僧天章は、或は又今日史蹟妙光寺の歲寒菴血染の緣先に天風脈々として無言の説法をなしつつある禪師は、一體如何なる思想的背景を持ち、その思想の淵源は何處にあつたであらうか？

先に一言せる如く禪師が淨土門より改衣歸禪した一つの理由は建仁寺の藏書である宋版楊誠齋文

集を讀破研究したいと云ふことであつたと云つたが、禪師が南宋の楊誠齋に私淑したことは禪師が後楊誠齋文集より千慮策・東宮勸讀錄等を選出して翻刻刊行したことを以てしても推察するに十分である。

この楊誠齋は南宋の人で、名を萬里、字を延秀と云ひ、又文節、落齋と稱し、誠齋と號して南宋の國難を救はんがために正心誠意の學風を以て忠憤慷慨し熱烈なる憂國の雄叫びをした人である。宋が文治主義を採るの餘りその消極的政策は北方民族の遼や金に禍され、遂ひには中原の地を蒙古民族のために蹂躪されて滅亡したことは周知の事實である。この宋が常に消極的なる對外政策を以て北方民族に對し、「朝詔親征し、夕に和議を講ずる」の姑息的外交政策を以てしたことは所謂北狄の猖獗を甚しくし、宋國の士氣を愈々萎靡不振ならしめた。

かゝる時代に出世した楊誠齋は南宋孝宗の淳熙十二年（西曆一一八五）吏部の郎中となり、又東宮講官として孝宗の太子の侍讀となり、陸宣公の奏議等を進講して太子を深敬せしめた。所謂東宮勸讀錄は即ち是れである。一日丞相王淮が宰相の先務は如何との問ひに對し、天下の急務は人材を以て先務となすべきことを獻言し、朱子以下六十人の天下有用の人材を推薦し、各々長所を述べて人材を集むべきことを力説した。このことは淳熙薦士錄^{註④}として輯録され現存してゐる。

後官を退いたが誠齋の民族意識は愈々熾烈にして南宋の姑息的對外政策を慷慨し、宰相韓侂胄の

專横を憂憤しつゝ寧宗開禧元年（西曆一二〇五）八十三歳を以て卒した人で、詩賦に長じ、前記千慮策、東宮勸讀錄、淳熙薦士錄等の外に易傳、心學論、楊子庸言等の著書があり、經世一家の學風があつた。^{註⑥}

禪師はこの誠齋の正心誠意の學風に私淑した。禪師が安政四年八月、千慮策を翻刻するに當り、その序文の中に

千慮一得。慨然欲吐者。有三十策。非敢謂有用也。亦不可謂無用也。其言切實懇到。一一中時弊可謂昏夜之一燈矣。（中略）

抑是策也。雖往時海外之策。方今亦豈無所關於

國家治忽之故也哉。固探之于宋槩誠齋集中。附以淳熙薦士錄。以授于剖劂。若夫公學術之正。識見之高。其有用於今日與否。讀者自當領之。固不俟我方外士之言也。

皇安政四年丁巳秋八月初五日

前住京輦十刹萬年山眞如禪寺沙門天章釋英肇海氏撰

とあり、以て禪師が如何に楊誠齋の學風を慕ひ、その識見に私淑してゐたかは推考するに餘りがある。而して禪師はこの千慮策三十策はその切實なる言々辭句一々が幕末維新の時弊に中り、混沌たる國家危急の際に於ける指針であつて、恰も暗夜の燈明の如くであるとなし、更に我が國が往時海

外に建てられた策に俟つ迄もないが、國家經綸に關する處、忽にすべからざることを強調してゐる。

又禪師が「國家」の文字のあるところを改行し、殊に年號の上に「皇」の字を戴して故に欄を一字だけ高くするが如きはよしそれが支那古代の聖賢の道に則つたとはいへ、禪師の人と爲りを知るべく、尊王心の發露であると云ふべきで、「皇土」「聖代」の觀念を強く認識して、幕末の風雲に抗し、怒濤に投じて國難に當つたものである。そしてこの書の刊行された安政四年は安政の大獄が行はれる一兩年前で、この書は天下憂國の志士の間熱讀された。

三

禪師が宋儒楊誠齋に私淑して、その學說思想が我が幕末の時弊を救ふものとなし、誠齋の正心誠意の學風や思想が禪師の指導原理となり、禪師をして熱烈なる勤王運動をなさしめ、憂國の士たらしめたことは簡單ながらその一端を前述した。

然らば楊誠齋の學問思想が指導原理として禪師に顯現された禪師の學說識見は如何なるものであるかを管見するならば、禪師の學說の一斑を表すものに「華夷を辨するの論說」があり、これは禪師の學識思想の根本形態をなすものであらう。今禪師の撰する華夷名義辨に依れば

春秋、謹嚴。莫嚴乎華夷之辨焉。方今世勢一變。華夷錯紛。名義淆亂。殆不可辨明矣。(中略) 夫華者文也。都也。中之之辭也。故連稱之。曰中華。曰華夏。郁郁乎有禮文、可觀之謂也。

夷者野也。鄙也。外之之辭也。故連稱之。曰外夷。獷獷乎無禮文、可觀之謂也。蓋一國。則自有一國之華夷矣。一州。則自有一州之華夷矣。一郡。則自有一郡之華夷矣。一縣。則自有一縣之華夷矣。一鄉。則自有一鄉之華夷矣。一家。則自有一家之華夷矣。

とて春秋の華夷を辨するの謹嚴であつことを冒頭し、華夷の義を明し、一國乃至一家の中にも禮文の觀るべきものが有れば華であり、禮文無ければ夷であるとなし、華夷は土地の中偏廣狹を云ふのでもなく又國土の大小新舊を云ふのでもなく、又國力の充闕を云ふのでもない。唯其の人の賢否に依るものであつて、政治文教の正邪にあることを力説し、又同文中に

假令其國幅員萬里。兵甲億數。富傾四海。勢凌宇宙。其君臣無禮。以姑息爲政。以輕便爲教。其俗無義。以利害處事。以得失應物。慢天道、逞私智、肆人欲、作獸行。更無一點羞惡之心。而亦不知名行節義、爲何物也。則謂之夷狄、謂之禽獸、而可也。

と云ひ又

雖其邦叢小。兵甲不充。而君臣有義。父子有親。男女有別。貴賤有等。忠信爲主。禮讓爲先。好生愛物。窒欲存誠。則其此爲華爲人耳。

と云ひ、華夷の別を儒教精神を以て論じてゐる。この華夷を辨するの思想は禪師の中心思想であり、この思想は臆て禪師の尊王精神となり、攘夷の論となつて顯れて來た。

四

禪師の尊王精神なり攘夷の思想が端的に表現されてゐるものを看取せんとするならば、禪師の詞藻に依らなければならぬ。明治二十六年六月梧庵和尚の編纂した建仁寺誌稿中に收められた「竺堂隨筆の事」に依ると禪師の詩文和歌雜記等は枚擧に邊はないが、上梓されて現存する梶花百絶、杞憂庵五十六字詩、杞憂餘草等には熱烈なる憂國の精神が詩となつてゐる。今その二三を擧ぐるならば

可掬眞香濯情容。天然高致壓芙蓉。無情花亦低頭問。孰遣皇威輝異邦。註⑥

と云ひ、又米國使節ベリーが黒船四隻を率ひて、浦賀に來航した嘉永六年の作で海防の急務を説いた詩に

癸丑書事註⑦

寧唯奔命列諸候。石上之人亦杞憂。論到邊防第一策。國家急務在尊周。

海口又聞夷虜窺。起拈拄杖細思惟。山中有個白雲好。不是眠于石上時。

と賦してゐる。周の王室を尊び、夷狄を攘ひて天下を匡すことは、聖賢の教ゆる尊王攘夷で、禪師が茲に云ふ「尊周」は吾が「尊皇」を意味することは云ふ迄もない。嘉永より安政にかけて諸外國の來航頻りにあり、幕府が外國の兵威を恐れて國論を無視したため、諸方の志士は憤激し、遂ひに

幕府が勅許を待たずして米國總領事ハリスの要求する通商條約に調印した安政五年に至つては攘夷論は國內を風靡するに至つた。同年春禪師が賦したる詩に

戊午春首註⑧

妖氛充四海。殺氣及神州。雖余在方外。得不抱深憂。

とて身は方外の僧侶であつても憂國の念禁すること能はず悲憤慷慨してゐる。禪師が莫逆の交りをも爲した三位大原重德卿に夷狄無信辨註⑨を撰して贈り、夷狄は變詐常無く信義なきことを極論し、或は又

西洋諸夷。航海萬里。奸詐百端。欺誣千計。貪人之土地。掠人之貨弊。損人之生理。害人之產業。物價爲之騰揚。民心爲之險詖。綱常爲之決裂。廉恥爲之泯絕。註⑩

と慷慨してゐる。ペリーが來航した嘉永六年以來攘夷論は多くの識者の間に唱道されたが、幕府の彈壓嚴しく己が所論を著書として世に公にし、憂國の第一線に立つた志士は禪師の誌すところに依ると維新迄に水戸黃門の破邪集、大橋順の關邪小言及び禪師の千慮策のみであつたことを、禪師が慶應四年二月、杞憂卷五十六字詩を刊行するに當り、同書の附録である杞憂餘草の序に述べてゐる。

周知の如く安政五年六月大老井伊直弼が米國總領事ハリスの要求する通商條約に勅許を待たずして調印したことや將軍家相續問題に專斷であつたことは少なからず諸方の志士を憤激せしめ、諸方

の志士は皆井伊直弼の違勅と專斷を責めた。そこで幕府は内大臣一條忠香を始め徳川齊昭・伊達宗城・川路聖謨・橋本左内・吉田松陰・頼三樹三郎・梅田雲濱等公卿・大名・幕臣・志士等の反對者を處罰し所謂安政の大獄を起した。

この大獄が行はれた安政五年も暮れゆく頃、禪師は大原重徳に左の如き詩を賦して贈つてゐる。

戊午歲杪寄大原源公註⑩

何必桃源遠避秦。梅花開處養天真。夜深高誦誠齋句。憂國如家有幾人。

當時禪師は幕吏の追跡を避けて但馬地方に隠れ、安政六年の初秋に城崎温泉より建仁寺塔頭大中院の石門和尚に書懷を寄せたり、註⑪又豊岡の南朝の古器を藏する秦有忠なる人の請に應じて錫を留めてゐる。乃ち杞憂餘草には次の如き詩を載せてゐる。

賦得 王事靡盬註⑫

但州豊岡秦有忠ノ請。有忠世世尊秦王室。家多藏南朝古器。其先子某所ア以之頼山陽作吉野笛ノ歌也。

至德軼商周。漢唐非厥儔。君臨百餘世。皇化洽神州。

文久元辛酉年秋、仁科白谷の墳墓を播磨の今市に奠めんとして途中湊川を過ぎ楠公の墓を弔ひ、廣嚴寺を訪れて寺主に楠公墓碑建立の緣由を聽き、父子國難に殉じたる皇朝無隻の忠臣を欽仰讚嘆し、且つ墓碑が水戸黄門義公に依りて樹てられ、公が楠公の節義を欽仰して碑を建て、自ら題して

「嗚呼忠臣楠子之墓」と書したことや、碑文を明末の義士朱舜水が撰したことなどにその感を深くしたが、その時の詩に

湊川弔楠公墳註⑮

天地風雲晦。忠臣死節秋。余來茲弔古。湊水尙悠悠。

と賦してゐる。維新の風雲急にして、多くの勤王の志士が忠節に死する秋、楠公の往時を回顧して轉感慨無量なるところのものがあつたであらう。

禪師は先に述べたる如く嘉永の頃より國事を憂へて天下の志士と交り尊王運動に一身を捧げたが特に大原重徳とは莫逆の交りを爲した。この大原重徳との關係に於て最も世に知られてゐることは文久二年五月の勅使問題である。朝廷では薩藩主島津久光の公武合體の建白書に基づき、幕閣の上落を命ぜられたが、その入落なきため、岩倉具視を勅使として下向せしむることになつた。それを聞いた禪師は關白近衛忠熙に「聰達にして大略ある岩倉卿は闕下を離るべきではなく、勁忠鯁直なる大原卿を以て勅使の任に當らしむべきである」ことを建言したため、廟議は遂ひに變更して、正三位大原重徳が勅使として江戸に下向することになつた。禪師は大原重徳に

讀書五千卷。歲月與人深。今日果何用。精誠一片心。註⑯

なる詩を寄せて激勵したが、禪師が著す杞憂餘草に依ると、禪師は大原重徳が勅使として幕府に下

向するを祝し且つ龍虎を詠じて贖けてゐる。今その詩を次に載せることとする。

恭賀攘夷送^ス

左衛門督正三位大原源公

勅使幕府

攘夷策決振天人。烈烈義風加處仁。御劍霜寒英斷夕。融成千載一時春。

咏龍虎贖大原源公東行。

風雲時際會。紅日射金鱗。由來帝王象。神化氣成春。(龍)

威獰魁百獸。草木夜風腥。一嘯千山震。斷崖缺月青。(虎)

五

慶應三年十月十五日征夷大將軍徳川慶喜の大政奉還の奏請を勅許し給ふた。明治天皇は、同年十二月九日王政復古の大令を發せられて諸事 神武天皇創業の御精神に基づくべき旨を宣せられた。併しこの王政復古の新政をば、譜代・幕臣の中には薩長兩藩等の專斷によるものであると考へ、鳥羽・伏見の戰、彰義隊、東北諸藩の叛亂等が起つたが相ついで鎮定したことは周知のことである。禪師は次の如き詩を賦して、

戊辰春初ノ書事註⑩

人心擾擾執維持。國事多端幾路岐。記得宋僧詩句雋。干戈元是太平基。

と所懐を咏じ、同年春、東宮勸讀録の翻刻や自著梔花百絶、杞憂菴五十六字詩等の發刊をなした。そして同年三月 明治天皇が紫宸殿に出御あらせられ、群臣を率ゐて天地神明に誓はせられた五箇條の御誓文を國民に宣せられ給ひ、明治の大御代となつた。續いて八月紫宸殿にて卽位の大典を行はせられ、翌九月には明治と改元され、江戸城は東京城と改名され翌二年三月には車駕東行して東京を帝都と定めらるなど維新の大政は隆々乎として進展した。聖代に浴した禪師は鳴瀧妙光寺に引き籠つて、只管翰墨を事としてゐた。明治四年五十七歳の新年を迎へて、

かれといひこれと答ふるいめの中に

五十七の春は來にけり 註⑮

と詠じ、波瀾萬丈なりしこしかたに思ひを深くしたが幾何もなく同年七月九日刺客の難に遭ひ示寂された。

禪師の生涯は、禪師の言葉を以て云ふならば、

宇内形勢。華夷錯紛。虎起狼伏。蚌是鷸非。示有不忍臥觀坐視於白雲幽石上者焉。 註⑯
であつた。

最後に阿刀弘文師の撰する建仁前住天章慈英著述目錄註⑰に依り禪師の著書を列舉してこの稿を結ぶ

ことゝする。

四阿舍折衷	二十卷	續日本禪詩史	十卷
四十二章經簡注	一卷	日本三僧詩	三卷
遺教經王正	二卷	日本釋氏一人一詩	五卷
圓覺翻藏	二卷	般若心經刮目	二卷
維摩無垢	五卷	日本百人一詩	二卷
楞伽表餐	四卷	日本釋氏三十六詩仙	一卷
楞嚴咀英	十卷	翰林百家絕句	五卷
金剛斧鑿	二卷	翰林三十六家絕句	三卷
起信藥籥	二卷	翰林五鳳集抄	三卷
日本佛法編年通論	二十卷	空華集抄	二卷
釋氏文選	五卷	蓮籍志	二卷
釋氏名文	二卷	宋詩快絕	一卷
皇朝緇苑英華	十卷	日本文淳	五卷
續皇朝緇苑英華	十卷	菅家詩抄	一卷
日本禪詩史	十卷	日本詩淳	十卷
		馬山風雅	三卷

禪關策進翼注
緇門崇行錄

勤王僧天章禪師の事跡

(一五)

韓詩選	二卷	唐僧詩	二卷
韓文略	五卷	宋僧詩	三卷
避世錄	二卷	明僧詩	二卷
儼塾集抄	二卷	清僧詩	一卷
岩居志	一卷	唐三高僧詩抄	三卷
橘窓文集後編	一卷註②	宋四名僧詩稿	二卷
橘窓文集續編	一卷	明三僧詩	三卷
覺世詩錄	一卷	歷朝僧詩史	十卷
警世詩話	二卷	釋氏一人一詩	三卷
堆雲夜話		儒士嘆佛詩	一卷
竺堂日抄	十卷	儒釋唱和錄	二卷
竺堂文抄	一卷	釋氏三十六詩仙	一卷
白天唱和	一卷	日本釋氏稽古畧	十卷
辛丑隣盟	一卷	續本朝高僧傳	十卷
白雲幽石草	一卷	延寶傳燈錄補正	五卷
竺堂詠草	一卷	皇朝佛法通塞論	三卷

釋氏袖手編	二卷	杞憂菴五十六字詩	一卷	附杞憂菴餘草
儒釋彌縫錄	二卷	杞憂菴梔花百絕	一卷	附東華辨
王學興廢錄	二卷	但泉遊草	一卷	
五嶽僧寶傳	三卷	戊午稿	一卷	
五嶽著籍志	一卷	丁己稿	一卷	
僧詩別調論	一卷	仁科白谷墓碑銘	一卷	
晉唐宋九僧詩	三卷	湊川神社建碑由來記	一卷	
六朝僧詩	一卷	天明火災史	一卷	

註① 竺堂文集楠塔緣起篇（眞言阿刀家藏）には「亡友白谷先生」とあるが、禪師は仁科白谷の門下となつたと云はれ、今は禪師より親しく教を受けた、石門和尚の筆跡である「天章禪師傳」の草稿に據つた。

② 千慮策は宋儒楊誠齋の著で君道、國勢、治原、人材、論相、論將、論兵、駁吏、選法、刑法、冗官、民政等三十策があり、安政四年八月天章禪師により三卷本として翻刻刊行された。

③ 東宮勸讀錄は同じく楊誠齋の著で南宋孝宗の代、東宮講官として進講した讀陸宣公奏議等五篇を輯して、安政五年刻發刊の豫定であつたが刊行されたのは慶應四年春である。

④ 淳熙薦士錄は誠齋が南宋孝宗淳熙十二年吏部郎中となつた時、宰相王淮に人材の急務を説き、朱子等六十人を擧げ、その長所を記したもので、後四十八年を経た南宋理宗の紹定五年辰年誠齋の男長孺により輯せられたもので、吾が安政四年千

勤王僧天章禪師の事跡

(一七)

慮策の附録として禪師に依り鑿刻された。

- ⑤ 宋元學案卷四十四、千慮策序。
- ⑥ 杞憂菴梅花百絕第二詠
- ⑦ 杞憂菴五十六字詩附錄杞憂餘草
- ⑧ 同書
- ⑨ 同書
- ⑩ 杞憂菴梅花百絕附錄華夷名義辨
- ⑪ 杞憂餘草
- ⑫ 大中院文書
- ⑬ 杞憂餘草
- ⑭ 眞言宗阿刀家針小路文庫の竺堂文集中楠塔緣起篇
- ⑮ 杞憂餘草
- ⑯ 同書
- ⑰ 同書
- ⑱ 建仁寺大中院所藏天章禪師筆跡短冊
- ⑲ 杞憂菴五十六字詩
- ⑳ 此の著述目錄は阿刀弘文師が、現禪門高等學院長小畠文鼎師の需めに應じて昭和四年九月三日記されたものである。尙千慮策三卷、東宮勸讀錄一卷は禪師の鑿刻である。
- ㉑ 阿刀弘文師曰く楠窓文集の前編は目下不明なりと。